

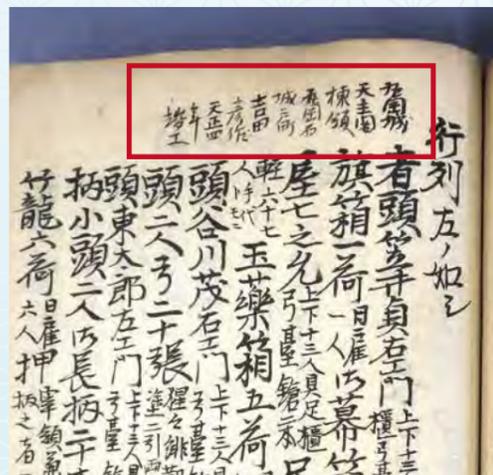
3. 丸岡城天守の大工に関する言い伝え

天守の建造や修復には、古くから様々な職人が関わりました。明治29年(1896)に旧丸岡藩士柳田俊雄が書写した『藤原有馬世譜』には、「丸岡城天守閣棟梁石城戸町吉田彦作、天正四年竣工」との興味深い書き入れがあります。『藤原有馬世譜』は文化11年(1814)にまとめられた丸岡藩有馬氏の家譜ですが、同じ記述が別本にみえないことから、この部分は明治時代に柳田俊雄が書き加えたものと思われる。

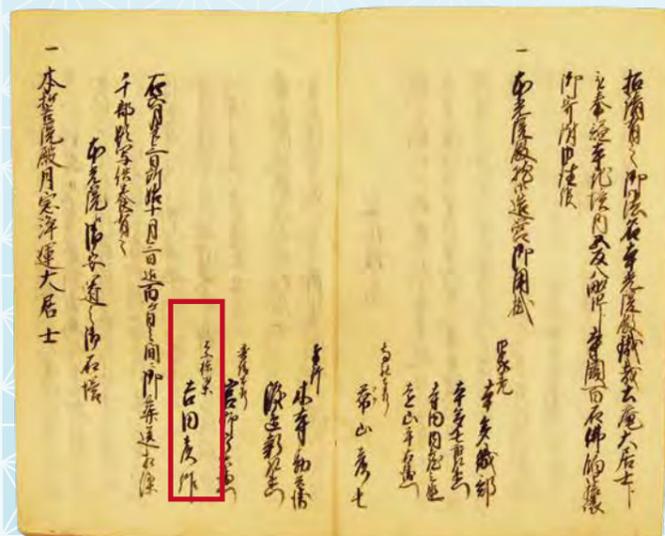
かなり後世の書入れであるため、この記述をそのまま信じることはできませんが、天守の大工棟梁として、具体的な人名が挙げられている点は注目されます。どうやら、明治時代には、丸岡城天守の棟梁を石城戸町の「吉田彦作」とする説があったようです。

天守への関与は不明ですが、丸岡に「吉田彦作」という大工が実在したこと自体は事実です。本光院記録抜書には、正保4年(1647)の本光院建立時の大工棟梁として、「吉田彦作」の名前が確認できます。ここから天守が作られた寛永年間から20年ほど後に、藩主菩提所の建造を任されるような大工として、吉田彦作という人物がいたことが、裏付けられるのです。

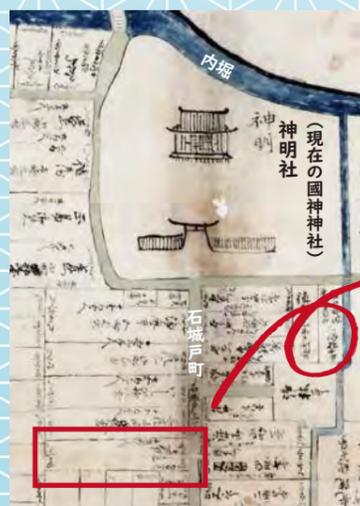
ところで、寛永年間の丸岡町屋敷割図には、石城戸町の屋敷主として「彦作」の名が見えます。ひょっとしたら、大工の吉田彦作でしょうか。今後も注目したい人名です。



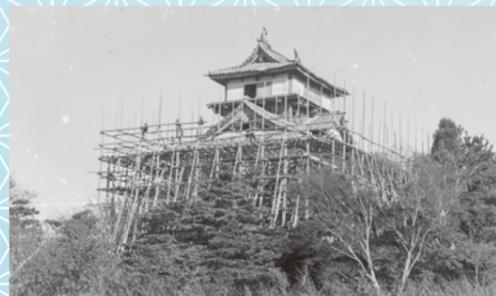
藤原有馬世譜(個人蔵)



本光院記録抜書(本多家資料 国立歴史民俗博物館蔵)
寛政2年(1790)に本光院の記録を抜粋したもの。赤枠内に本光院建立時の大工棟梁として「吉田彦作」とある。



丸岡町屋敷割図(個人蔵) 寛永年間の丸岡城下を描いた図



戦前の修復工事写真(竹原写真)
天守の維持管理・修復には、様々な職人や技術者が携わってきた。

○あしがき○

令和3年度は丸岡城に関連する文献資料の調査を実施しました。城主の滅亡や改易により、丸岡城に関する文献資料は少ないですが、建築・考古等の他分野とも連携しつつ、今後も継続して調査していきたいと思えます。なお今回の文献調査をまとめた資料集第2集も刊行されます。併せてご覧いただけますと幸いです。

令和4年3月 編集・発行

坂井市教育委員会 文化課
丸岡城国宝化推進室

〒910-0231
福井県坂井市丸岡町霞町1-41-1
電話:0776-50-2270 FAX:0776-50-2553
E-mail:bunka@city.fukui-sakai.lg.jp

知られざる丸岡城

令和3年度文献調査でわかったこと



令和3年度は、城主柴田~本多時代の丸岡城に関する文献調査を実施しました。今回は調査の結果わかったことや、また新たに出てきた謎について紹介します。

坂井市教育委員会 丸岡城国宝化推進室

1. 丸岡城で戦闘はあった？

丸岡城の別名「霞ヶ城（霞城）」の由来は諸説あります。有名なのは、敵勢に囲まれた丸岡城を霞が取り巻いて守ったという伝承です。この話自体は後世の伝説ですが、実際に丸岡城での戦いはあったのでしょうか？

天正3年（1575）、織田信長は越前一向一揆を攻め滅ぼし、一国を平定しました。その後、加賀一向一揆への防衛・攻撃の拠点として、天正年間に柴田勝豊が築いたのが丸岡城です。

『雑録追加』所収の亀田大隅軍功之覚には、築城間もない頃の丸岡城での戦闘をうかがわせる記述があります。本史料は、亀田高綱が生涯の軍功をまとめた覚書と考えられます。亀田高綱は、柴田勝家や柴田勝豊にも仕えた人物で、勝家滅亡後は浅野長政に仕え、関ヶ原の合戦や大坂の陣にも出陣しました。

さて、亀田大隅軍功之覚には、高綱の軍功として、天正6年（1578）の丸岡城への一番乗りや、丸岡城大手での槍合わせが挙げられています。仮に事実ならば、この年に丸岡城で何らかの戦闘が行われていたことになります。残念ながら、天正年間の史料で裏付けることができず、事実



昭和15年頃の天守台石垣（竹原写真）
昭和23年の福井地震での崩落前の写真。石垣は慶長以前と考えられ、柴田勝豊の時代の可能性も考えられる。



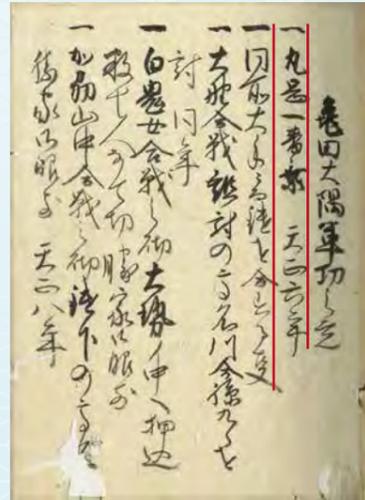
丸岡城と周辺の地名（国土地理院2.5万分の1地形図を加工して作成）
赤字は天正8年頃大坂本願寺に懇志を送り支援していた村（福円寺文書）

関係は確定できませんが、本史料から、江戸時代には、丸岡城での戦闘が伝えられていたことがわかります。

天正3年の信長による平定後も、越前では大規模な一向一揆の蜂起がありました（小丸城跡出土文字瓦）。また、北方には敵対する加賀一向一揆や上杉謙信が残り、天正5年（1577）には、加賀に出陣した柴田勝家が手取川で上杉謙信に敗北しています。築城当時の丸岡城をめぐる軍事情勢は緊張したものでした。

天正8年（1580）の教如消息（福円寺蔵）には、信長と敵対して籠城中の大坂本願寺に懇志を送っていた越前の本願寺門徒の所在地が記されています。注目すべきは、ここに猪爪、小黑、丸岡といった丸岡城近隣の村々が挙げられている点です。ここから、天正8年に至っても、丸岡城の近くの村々が本願寺に懇志を送っていたことがわかるのです。

天正年間に丸岡城で合戦が行われたのかについては、現時点で答えを出すのは困難です。しかし、柴田勝豊の時代の丸岡城が、一向一揆や周辺の村々との緊張関係の中にあつたことは確かでしょう。



雑録追加（石川県立図書館蔵）
加賀藩に仕えた有沢永貞（1639～1715）が、中世から近世にかけての古文書等を書写・収録した書物。傍線部に丸岡城での戦闘が記される。

2. 本多成重と丸岡城

丸岡城天守は、江戸時代の寛永年間（1624～44）につくられたことが明らかとなっています。では、なぜこの時期に天守がつくられたのでしょうか。寛永年間を通して城主であった本多成重の事績に注目してみましょう。

もともと成重は徳川家康に仕えていました。しかし、慶長17年（1612）の越前松平家の家中騒動（久世騒動）後、若年の福井藩主松平忠直の補佐のため、幕府から派遣され、松平家の家老となりました。この頃の丸岡城は、松平家の有力家臣が居住する支城となっており、慶長18年（1613）以降は、本多成重が城主となっています。

江戸幕府の公務内容を記した『年録』には、主君の松平忠直が、家臣である成重の丸岡城を攻めようとしたとの興味深い話が書かれています。元和年間頃から、忠直は江戸への参勤を怠るなど、無軌道な振る舞いが目立つようになりました。元和8年に成重が諫言したところ、かえって忠直は立腹し、丸岡城を攻める用意をみせたため、成重は密かに丸岡城を抜け出て、京都所司代に相談に行っ

たとされます。

元和9年（1623）には、藩政の乱れにより、忠直は幕府から隠居を命じられて豊後国（大分県）に配流となり、子の仙千代（松平光長）が跡を継ぎました。『年録』によれば、この時、隠居した忠直が敦賀に下ったのと入れ違いに、成重が越前に戻り、松平家中や国中に対し、忠直を越前に返さないようにとの上意を伝えたといいます。

翌寛永元年（1624）、本多成重は越前松平家の重臣から、再び將軍の直臣となり、独立した大名として認められました（丸岡藩の成立）。

天守建造の経緯を記した古文書等は現時点で確認できませんが、時期的にみて丸岡藩成立が今の天守建造の契機となった可能性が高いと思われます。本多成重は丸岡城天守に関する最大のキーパーソンといえるでしょう。



松平忠直画像（浄土寺蔵・写真提供大分市歴史資料館）
福井藩2代藩主。父結城秀康は徳川家康の次男であり、忠直は家康の孫にあたる。

丸岡城年表（柴田氏～本多氏）

年	城主	内容
天正3年(1575)	柴田氏	織田信長、一向一揆が支配する越前を平定し、柴田勝豊に「豊原之城」を任せせる。
天正4年(1576)頃		この頃、柴田勝豊、豊原を離れ丸岡城を築くという。
天正13年(1585)	青山氏	青山宗勝、丸岡城主となる。
慶長5年(1600)	今村氏	関ヶ原の合戦後、結城秀康が越前を拝領（福井藩の成立）。重臣の今村盛次が丸岡城主となる。
慶長12年(1607)		結城秀康死去。子の松平忠直が跡を継ぐ。
慶長17年(1612)		福井藩の家中騒動（久世騒動）により、今村盛次が失脚する。
慶長18年(1613)	本多氏	本多成重、福井藩に付家老として派遣され、丸岡城主となる。
元和9年(1623)		松平忠直、幕府より隠居を命じられ、豊後に配流となる。
寛永元年(1624)		本多成重、幕府に4万6300石の大名として認められる（丸岡藩の成立）。
寛永年間(1624-44)		この頃、今の丸岡城天守が建造される。
正保4年(1647)		本多成重死去。本多重能が跡を継ぐ。菩提所本光院が建立される。
正保2年(1645) 慶安4年(1651)		本多重能の時代に、城郭の整備が完了したという。
元禄8年(1695)		本多重益、改易となる。



横矧二枚胴具足（本多家資料、国立歴史民俗博物館蔵）
本多成重着用とされる胴具足